

プログラムノート

心が耳と化して聞き入らねば、ついて行けぬようなニュアンスの細やかさがある。一と度この内的な感覚を呼び覚まされ、魂のゆらぐのを覚えた者は、もうモーツァルトを離れられぬ。(小林秀雄「モーツァルト」より)

オペラ「イドメネオ」K.366(1780年作曲)は、モーツァルト最初の充実したオペラ・セリアで、24歳の時に書かれた。トロイア戦争後のクレタ島を舞台にした神話的な物語である。バイエルン選帝侯カール・テオドールの宮廷の委嘱作品で、彼はザルツブルクからミュンヘンに赴き、歌手に稽古をつけながら作曲を進めた。この上演のあと、彼はウィーンにわたり、大司教との衝突を機に当地に留まることになるので、本作品は故郷を離れるターニングポイントとなった。

序曲は二長調で、マンハイム・ロケット(上昇音階)の音型が特徴的。名手揃いのミュンヘンのオーケストラを相手に充実したオーケストレーションがなされている。短いながらも、美しい余韻とともに本編へといざなう効果を有し、魅力的な幕開けを演出する。

交響曲第25番短調K.183(1773年作曲)はモーツァルト17歳の作。ユニゾンによるショッキングな開始からして度胆を抜かれるが、両端楽章における執拗なシンコペーションや減七度の不協和音程の強調には、思春期のモーツァルト少年に迸る大胆なロック精神を聴く思いがする。弦楽器とファゴットの対話が美しい第2楽章も、半音階的ですこぶる陰翳に富んでいる。なお、この曲の第1楽章をエレキギターでカヴァーした演奏がYouTubeに上がっており、この楽器のパンチの利いたサウンドが面白いほど音楽と融合していた。

神童モーツァルト少年は、父レオポルトに連れられ各地を演奏旅行して廻っては、現地ですさまざまな最新の音楽に触れ、そのエッセンスを吸収していった。3回目のウィーン旅行からザルツブルグに帰ったばかりの時期に書かれたこの曲は、とりわけ同じ調性で書かれたハイドンの交響曲第39番短調(1768年作曲)にインスパイアされていることがしばしば指摘されるが、先達よりも遙かにドラマティックな仕上がりがた。ホルン4本の編成も輝かしい効果を生んでいる。現在演奏会レパートリーとして定着しているモーツァルト作品としては最も初期のものであり、17歳のモーツァルトの挑戦的な意欲が随所にみなぎっていて快い。

交響曲第35番二長調K.385「ハフナー」(1783年作曲)はモーツァルト27歳の作。彼がウィーンに移り住んでから最初の交響曲で、トランペットやティンパニの活躍にも彩られ、全編祝祭的な華やぎに満ちている。折しもオペラ「後宮からの誘拐」の作曲直後で、喜劇オペラに通じるわくわくした気分がここにも充満しており、第4楽章のテーマもオスミンのアリア「おお何という勝利だ! O wie will ich triumphieren」から採られている。

テーマの掛け合い(カノン)や、対旋律との絡みなど、ポリフォニックな対話の面白さも特徴的だ。「ぼくは毎日曜日の十二時に、スヴィーデン男爵のところへ行きますが、そこではヘンデルとバッハ以外のものは何も演奏されません。ぼくは今、バッハのフーガの蒐集をしています。」(1782年4月10日付の父宛の手紙)モーツァルトは、この頃、有力なパトロンであったスヴィーデン男爵との交流からバッハ作品に傾倒するようになり、その影響が「ハフナー」のスリリングなポリフォニーにも見て取れる。

この交響曲は、旧作のセレナードを改作したものだ。前年の夏、モーツァルトの郷里ザルツブルクで、名家ハフナー家のジークムント2

世が貴族に叙せられることになり、父レオポルトからの求めで、その祝宴で披露するためのセレナード(6楽章)を作って、できた楽章から急いで順次ウィーンから書き送った。翌年、父から譜面を返してもらい、2つの楽章(行進曲とメヌエット1曲)をカットして編み直したのがこの交響曲「ハフナー」である。この際、モーツァルトはフルートとクラリネットのパートを加筆しており、響きも一層充実したものになった。

面白いのは、モーツァルト自身が前年のセレナードの中身を覚えていなかったことで、父に返してもらった譜面を見て、その出来栄を自画自賛している。「新しいハフナー=シンフォニーはわたしを全くびっくりさせました。わたしにはなにも言うことはありませんでした。きっとよい成功を取めるにちがひありません。」(1783年2月15日付の父宛の手紙)こうして、「ハフナー」は交響曲として新たな生命を獲得し、1783年3月23日のブルク劇場での演奏会で初演、大成功を取めた。「ともかく、劇場はこれ以上詰め込む余地がないくらいで、ボックスも全部ふさがりました。何よりも嬉しかったのは、皇帝陛下(ヨーゼフ2世)がお見えになり、大層ご満悦の様子で、大いに喝采をして下さったことです。」(1783年3月29日付の父宛の手紙)

モーツァルトは、この交響曲の初演が終わって間もない8月、父の承認を待たずして、かねてから交際してきた最愛の女性コンスタンツェ・ヴェーバーと結婚する。自身の名声も高まりつつあり、ウィーンでの新生活は希望に満ちていた。そんな充実した当時の心境が、生命力と幸福感みなぎる「ハフナー」の音楽にもうかがえる。

ウィーンで名声を高めたモーツァルトは、1784年~86年、次から次へとピアノ協奏曲の新作を自らの手で発表(第14番変ホ長調K.449~第25番ハ長調K.503の12曲)し、大変な人気を築いていた。シンフォニックで、オペラのようなドラマ性を持ち、管楽器のチャーミングな独奏がピアノと戯れるモーツァルトのピアノ協奏曲は、ハイドンとは異なる新しい世界で、とりわけ第20番以降は奇跡的な傑作揃いだ。

ピアノ協奏曲第22番変ホ長調K.482(1785年)はモーツァルト29歳の作で、オペラ「フィガロの結婚」と同時期に書かれたもの。モーツァルトのピアノ協奏曲中最も演奏時間の長い大作で、同じ調性で書かれたのちのベートーヴェン「皇帝」にも通ずるような気宇壮大な楽想を湛えている。第2楽章はハ短調で深い憂いを湛え、無邪気に胸躍らせるフィナーレと新鮮なコントラストをなす。オーボエの代わりにクラリネットを用いた初めてのピアノ協奏曲だが、これは、クラリネットの名手アントン・シュタードラーとの出会いに触発されたところが大きい。

モーツァルトには、管楽合奏のために書かれた作品として、セレナード第10番変ロ長調「グラン・パルティータ」K.361という極上の傑作があるが、第22番や第24番のピアノ協奏曲でも、モーツァルトの紡ぎ出す絶美の管楽アンサンブルを存分に堪能できる。本作では、とりわけ、ハ短調の第2楽章(変奏ロンド形式)に挿入される長調のエピソードや、6/8拍子のフィナーレに挿入される3/4拍子のエピソードで、管楽器群(フルート、クラリネット、ファゴット、ホルン)のしみじみとした対話が聴かれ、その澄明な響きは一抹の哀しみさえ心に運んでくる。ピアノと管楽の協奏交響曲のような作品と言っても過言ではないだろう。

本日は、私がピアノと指揮を兼ねた「弾き振り」スタイルで演奏させていただくが、モーツァルト自身もこのような弾き振りで演奏していた。作品の性格を考えると、室内楽のような直接的な対話という意味で、指揮者が介在せずにピアニストとオーケストラの各奏者が対話するこの形態が本来理想的なのかもしれない。札幌シンフォニエッタの皆様

文:内藤 晃